

「南房総捕鯨伝承施設」 ～醍醐新兵衛墓所、鯨塚ほか～

千葉県鋸南町

日本の最も古い捕鯨史は、慶長13年(1608)紀州太地(和歌山県)で始まった記録があるが、その数年後の慶長17年には房総捕鯨発祥の地、勝山においても記録資料が残されている。勝山は、里見水軍の本拠地であり、水軍として戦に駆り出されることもあった勝山の漁師たちは、その勇猛さと熟練した船のあやつりで、鯨に挑むことができたとも考えられる。

江戸時代初期、勝山村の浜名主であった醍醐新兵衛定明は、勝山の捕鯨を組織化した。大組17隻、新組16隻、岩井袋組24隻の計3組からなる船株組織である。この船株は世襲制で、株の移動には、元締、醍醐家の許可が必要であった。これに旗頭や世話人らの幹部と、羽刺などの総勢500余名の海上乗組員がおり、他に出刃組、釜前人足など陸まわり70余名からなる。漁期は6～8月の間で、浮島沖に回遊してくるツチクジラが獲物である。

浮島の北側約400～800mの深みは鯨道と呼ばれ、浮上してきた鯨を発見すると直ちに捕鯨船団が構成された。ハヤという熟練した親方漁師が一番モリを投げ、その後一斉にモリが飛ぶ。モリには網がついていて、それを鯨に引かせ、やがて力尽きた鯨が海上に浮き上がるのを待つ。海上では鯨を突く

と、ノボリで合図し、それを勝山の港の高台で魚見をしている者が、醍醐家に知らせる。聞きつけた勝山の人たちが歓喜して浜辺で出迎える中、鯨を引いた船が、鯨唄を歌い意気揚々と入港してくる。

鯨は、港の烏居島につなぐれ、翌朝、出刃組によって解体される。元締めに渡されるのは商品価値の高い厚い皮下脂肪で、灯火用燃料や害虫駆除用の鯨油を絞り出すことができた。突組には赤身が分配され、捕鯨期が夏場であるため保存用に天日干しにされた。これが房総特有の郷土食「鯨のタレ」である。



鯨塚



醍醐新兵衛墓所